

第 3 章

個別の指導計画を授業に生かすための工夫と授業への接続

1 個別の指導計画を授業に生かすための作成段階における改善

個別の指導計画を授業に生かすためには、まず、その作成段階においてどのような書式を用いるかというタイプの検討と、どこまで具体的に計画するかというレベルの検討が必要である。タイプの検討については、指導目標や課題へのアプローチの場や機会を事前に明確にすることで、授業との接続を強くする。レベルの検討については、単元や題材レベルまで下ろすことや指導内容・方法まで具体化する取組が大切である。

2 個別の指導計画と全体指導計画との関連・整合性に関する整理

ある単元や題材の指導を展開する場合には、個別の指導計画とその学習集団の全体指導計画に計画されている指導目標や学習内容などを個別化あるいは集団化させて、授業実践につなげていくことになる。日々の授業においては、更に目標・内容・方法が個別化され、その評価結果から個別の指導計画と全体指導計画を見直していくことが大切である。

3 個別の指導計画における評価の改善

個別の指導計画の評価結果を授業改善に生かすことで、両者の接続がより強くなる。評価には学習の評価と指導の評価の二つの側面があるが、それぞれの評価の観点を明確にした上で、前者の結果を後者の評価に生かし、積極的に指導方法等の改善に生かしていく取組が大切である。

4 個別の指導計画に基づく授業設計の進め方

個別の指導計画に基づいて授業を設計するということは、日々の授業について指導目標、指導内容、指導方法、評価の個別化などを図ることを意味している。いずれの個別化についても、個別の指導計画に計画された概括的な情報をその指導の形態や授業の特性に合わせて、より柔軟に確実に実践できるものとして具体化する取組が求められる。

図2は、実態調査における自由記述や前章の「調査のまとめ」を基に、個別の指導計画を作成してそれに基づく授業を展開しようとする際に、各段階ごとにどのような課題があるかを整理したものである。この図からも分かるように、個別の指導計画を授業に生かすという場合の課題は、「授業に接続するという視点からの指導計画の作成方法そのものの問題」、「全体指導計画に基づいて授業を計画・展開する際の個別の指導計画との関連性の問題」、そして「授業展開後の個別の指導計画の評価と授業改善へのつなげ方の問題」の大きく3点に整理できる。

そこで、本章では、これら3点の課題についてどのような工夫や取組が大切になるのかをまず述べ、次に、個別の指導計画に基づく授業の設計・展開の具体的な進め方について述べる。

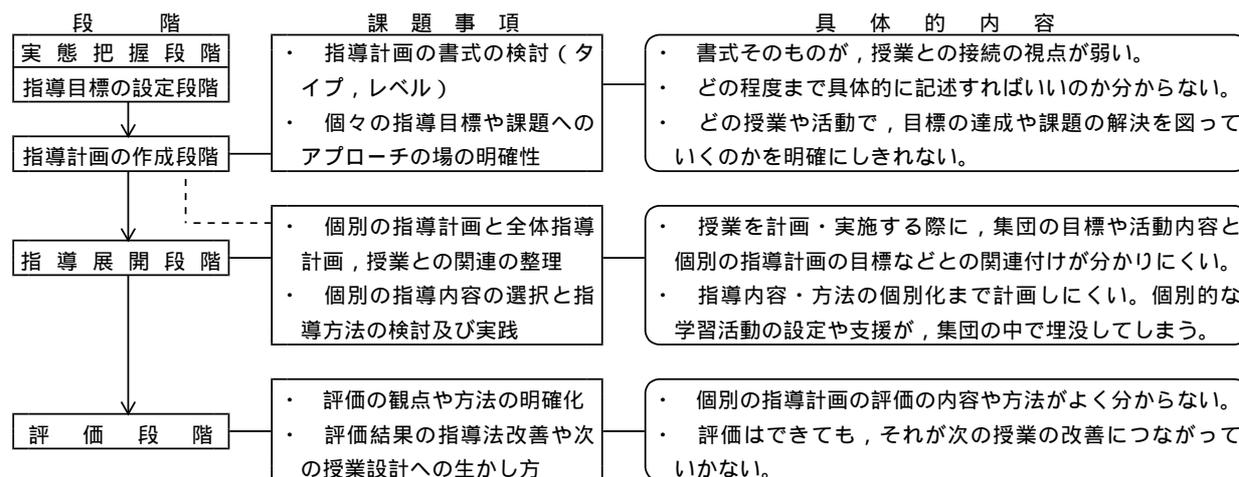


図2 個別の指導計画を授業に生かす上での課題

1 個別の指導計画を授業に生かすための作成段階における改善

本項では、個別の指導計画を授業に生かすための1点目の課題として、授業への接続のしやすさという視点から、その作成段階においてどのような工夫や改善が必要かについて述べる。

(1) 個別の指導計画の書式のタイプの検討

一口に個別の指導計画と言っても、各校において作成しているものは様々なタイプやレベルに分けられる。三浦(2003)は、個別の指導計画の書式のタイプを、図3に示すような4種類に分けている。

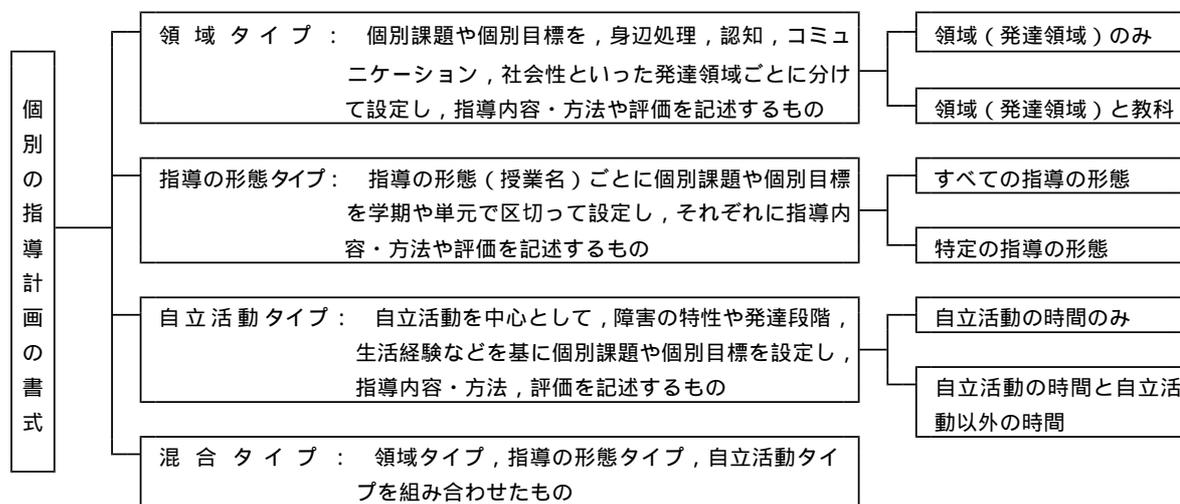


図3 個別の指導計画の書式のタイプ

さらに、それぞれのタイプの長所と短所は以下のように整理できる。

表1 個別の指導計画における書式のタイプごとの長所と短所

タイプ	長 所	短 所
領域タイプ	発達領域ごとに課題や目標を設定できるため、その子どもの全体的な発達のとらえや課題の設定がしやすく、指導内容・方法の選定についてもその子どもの全体像を網羅する形で焦点化しやすい。	発達領域は必ずしも教育課程に基づく日々の授業と対応していないため、発達領域ごとに設定した目標と授業とを対応させにくい。
指導の形態タイプ	時間割に対応して目標等を設定するため、領域タイプに見られた授業との対応という点での課題は解決しやすくなる。	指導の形態ごとに目標や内容を設定するために、必然的に目標の数が多くなり情報が膨大になるので、それらの目標間の関連性を把握しておく必要がある。
自立活動タイプ	自立活動の五つの柱、22の内容を基にして指導課題や目標を設定するために、その子どもの中心的な課題やそれから派生する課題を明確にしやすい。	時間を特設せず、学校教育活動全体の中で自立活動の指導を進める場合の計画については、個々の授業の目標とどう関連付けて目標を設定するかが難しい。

これらの書式のタイプの中からどのタイプに基づいて個別の指導計画を作成するかは、子どもの障害の状態や発達段階などの実態、あるいは学校・学部・学級の実態に応じることになる。基本的には、それぞれのタイプの長所や短所を考慮し、混合タイプとして学校独自の書式を用いることが望ましい。

ただし、個別の指導計画を授業に生かすという観点から、これらのタイプに共通して、設定した指導目標や課題へのアプローチの場や機会が不明確になりやすいという課題がある。この課題解決の方策として以下のような取組が期待される。

ア 領域タイプ、自立活動タイプにおける指導の場を明確にするための工夫

個別の指導計画の特に領域タイプにおいては、コミュニケーションや社会性、運動といった発達領域ごとに指導目標が設定されるため、教育課程に基づく学習指導において、主にどのような場や機会での目標の達成が図れるのかが不明確になりやすい。自立活動タイプにおいて、教育活動全体を通じて課題にアプローチする場合でも、同様の傾向がみられる。このような問題点を解決するための一方策として、表2のような書式上の改善を行い、目標や課題へのアプローチの場や機会を事前に明確にしておくことが考えられる。

表2 指導の場を明確にした個別の指導計画書式例

領域	短期目標	指導内容	指導方法・手だて	指導の場
言語・数量	教室や家庭にある品物の名前(テレビ, かばん, 机, いす)を実物を見て言うことができる。	当てっこ遊びの中でテレビ, 机, いすなどの実物を指し示す。「テレビ付けて」、「かばん持ってきて」などの言語指示を受けて、対象物を識別して行動化する。	名称を聞いて実物を指し示す活動に、名称の復唱を取り入れていく。 教師や保護者が対象物を指し示して行動化する手続きから、言語指示だけに変えていく。	国語 「当てっこ遊び」 日常生活の指導 「帰りの会」 家庭生活における お手伝い場面

イ 指導の形態タイプにおける指導の機会を明確にするための工夫

指導の形態タイプの個別の指導計画は、教育課程との関連性・整合性を比較的考慮しやすい。しかし、設定される目標は教科や領域ごとの大きな単位であり、それらの教科・領域で扱うすべての単元・題材、または学習活動において、その目標達成や指導課題へのアプローチを図っていくとは考えにくい。そこで表3のように、指導課題と単元・題材との関連表を

作成し、どの単元や題材、あるいは学習活動で個々の指導課題に中心的にアプローチするの
かを事前に焦点化し、明確にする方法が考えられる。

表3 指導課題と学習活動の関連表（生活単元学習）

単 元 名	指 導 課 題 主 な 学 習 活 動	意	サ	後	自	て	友	分	様	活	友
		思 を 表 出 す る	イ ン を 用 い て	ま で 取 り 組 む	分 の 役 割 に 最	活 動 す る か わ っ	達 と か わ っ	か ら 取 り 組 む	々 な 遊 び に 自	動 す る	達 と 協 力 し て
一 次 運 動 会	1 運動会について話し合う。 (1) VTRを見て昨年の運動会を思い出し、知っていることを発表する。 ・ 参加種目、応援、係 (2) 今年の運動会について調べる。 ・ 期日、種目、係・役員										
	3 運動会の準備をする。 (1) 組分けや係を決める。 ・ 紅白、応援係、旗係 (2) 係活動を行う。 ・ 応援の道具を作る。 ・ 看板を作る。										

学習活動と指導課題の関連性が大きく、アプローチが期待されるもの

学習活動と指導課題の関連性が非常に大きく、積極的な課題へのアプローチを計画したいもの

(2) 個別の指導計画のレベルの問題

個別の指導計画は、どこまで具体的に記述するかというレベルの問題が授業との接続に大きく関係する。そのレベルは、図4に示すように、作成手順、指導期間、記載内容の三つの観点からみたレベルに分けることができる。

この図からも分かるように、例えば作成手順からみたレベルでは、学習指導案に具体化することや評価まで実施する。また、指導期間からみたレベルでは、年間や学期といった大きなスパンでなく、月ごとの単元や題材レベルまで下ろす。さらに、記載内容からみたレベルでは、指導目標だけでなく、内容・方法まで具体化する取組がそれぞれ授業との結び付きを大きくすることになる。

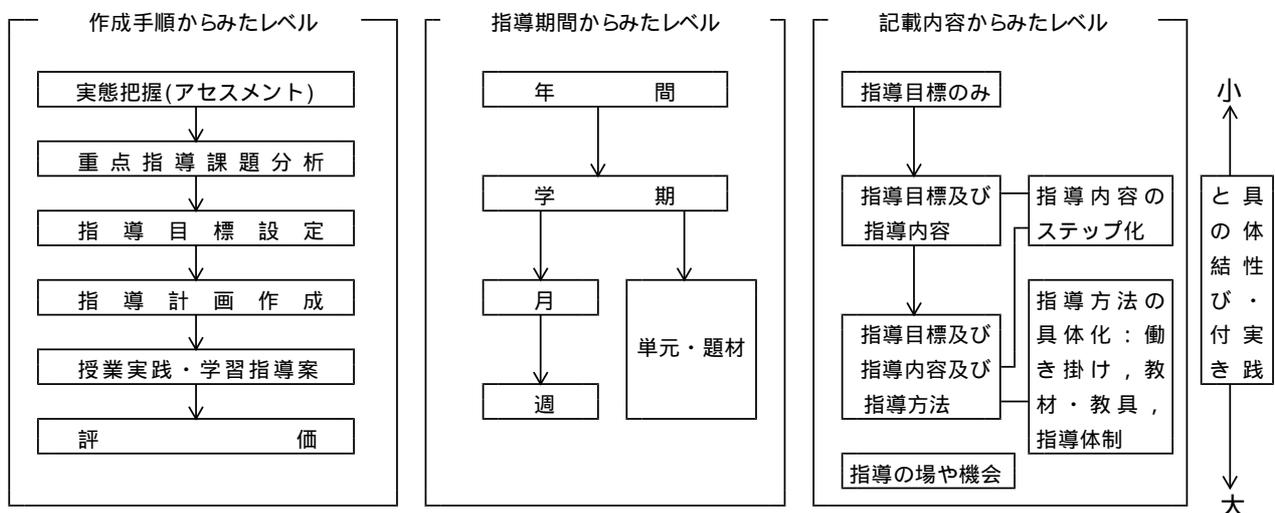


図4 個別の指導計画におけるレベル

2 個別の指導計画と全体指導計画との関連・整合性に関する整理

個別の指導計画を授業実践に生かすための2点目の課題として、個々に作成する個別の指導計画と、その子どもが所属する学習集団の全体指導計画が、どのような関連性や整合性をもって授業実践に移されていくのかを、事前に整理しておくことが挙げられる。両者は実践上の両輪の関係にあり、両者を充実させて、授業実践の場でその確実な目標達成を図ることが求められる。図5は、三者の関係を構造図で表わしたものであり、表4は、三者の間でどのような情報が行き交うかを例示したものである。個別の指導計画を授業実践レベルで活用するためには、図・表にも示すように、個別の指導計画と全体指導計画の双方向性の関係を重視するとともに、個別の指導計画を単元・題材レベルにまで具体化することが大切になる。

また、個別の指導計画と学級や学年、学部集団などの全体指導計画が関連性をもつということは、教育課程を個の視点で見直し、改善することも意味している。具体的には、個別の指導計画の評価結果を集約し、より強く個々の教育的ニーズにこたえる視点から、教育課程の基本構造や日課表、授業時数などの見直しにつなげていくものである。このように、個別に指導が最適化されたものになるためには、個別の指導計画と全体の指導計画を関連させ、両者の調和を図りながら個が生きる授業実践を充実させていくことが大切である。

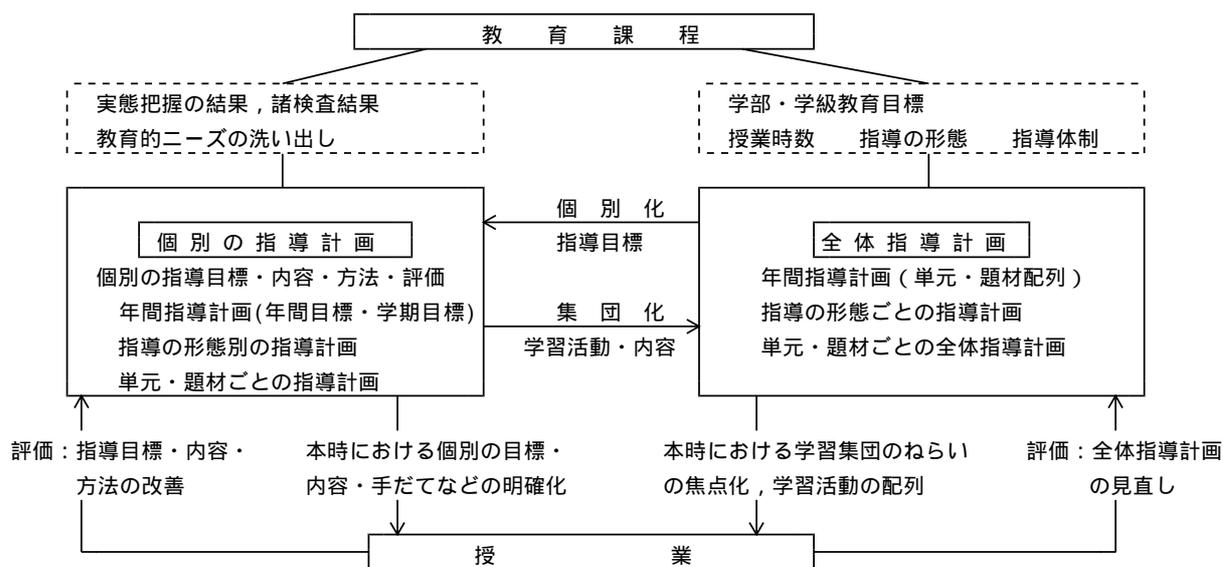


図5 個別の指導計画と全体指導計画，授業との関連

表4 生活単元学習「運動会」における ~ の内容例

全体指導計画に設定されているその学習集団の「運動会」単元における指導目標を、その子どもの生活単元学習年間目標を基にして具体化し、単元全体の個別の指導目標を設定する。
個別の指導目標を達成するとともに、個々の指導課題へもアプローチできる学習活動を組織し、それを集約することで、全体指導計画の学習活動の設定や配列の見直しをする。
全体指導計画における指導目標や学習活動を基に、本時における学習集団全体の目標を設定し、学習活動を設定・配列する。
学習集団全体の本時の目標を基に、その子どもの指導課題へのアプローチを考慮しながら個別の指導目標を設定するとともに、その子ならではの学習活動や支援の個別化を図る。
その子どもの学習状況（興味・関心や意欲，集中度）や個別の指導目標の達成度を明らかにし、目標や学習活動の妥当性などを検討するとともに支援の手だての改善につなげる。
学習集団全体の子どもたちの評価結果を集約し、全体指導計画の学習活動の設定・配列の見直しに役立て、次時以降の授業設計の改善を図る。

3 個別の指導計画における評価の改善

個別の指導計画を授業に生かす上で、個別の指導計画の評価結果の授業改善へのつなげ方という3点目の課題が挙げられる。

評価とは、一人一人の子どもによりよい発達を目指して行うものである。そのためには、日々の指導において、一人一人の成長・発達がどのようであったか、その成長・発達を支援するための指導が十分なものであったかを明らかにする。もし、不十分であった場合には、今後どのような支援を行っていけばよいかについて、明確にしなければならない。

したがって、個別の指導計画における評価も、子どもの学習状況に関する評価と教師の指導の在り方に関する評価の二つの側面から実施されることになり（表5参照）、指導と評価の一体化を図ることが大切である。具体的には、図6に示すような流れや観点で実施することになる。

表5 知的障害養護学校小学部の算数科の個別の指導計画における短期目標の評価例

目標	教師と一緒に、提示された10円硬貨を見ながら、10とびで200まで数えることができる。	
評価	A：完全にできる C：できたりできなかつたりで安定しない	B：ほぼできるが定着までには至っていない D：ほとんどできない
具 体 的 評 価	〔目標達成度〕 これまであまり経験のない学習活動であったために、教師と一緒に数えることで課題の意味理解を図りつつ、10とびでの数唱をねらった。取組の中で100までは教師の援助がなくても自分の力で数えられるようになったが、200までとなると、途中で注意の集中が途切れてしまい、教師の「ひゃく？」という言葉掛けが必要であった。まだ安定していない。 〔指導の手続き〕 ・ 目標として200までを設定したことは無理ではなかったと思われる。しかし、手続き的に、提示された硬貨を機械的に数える課題は本児に抵抗を強く感じさせ、それが注意の途切れや意欲低下につながっていったと思われる。本児が興味を示す買い物ごっこのような具体的場面での同様の取組が望まれる。	
展 望	目標としては同じものを継続し、教師と一緒に数えることの定着を図りつつ、徐々に援助を減らしていきたい。手続き的望には、買い物ごっこ場面を中心に置き、必然性のある状況で主体的な数唱を引き出していきたい。	

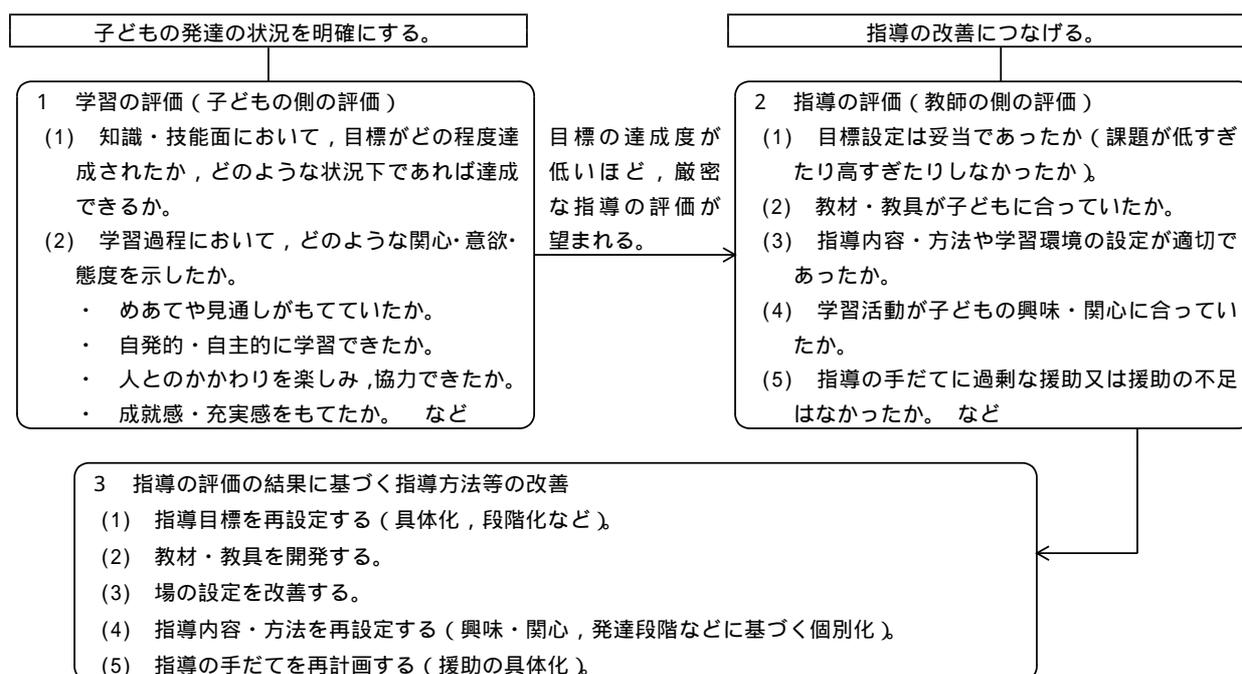


図6 個別の指導計画における評価の手順と内容（観点）

4 個別の指導計画に基づく授業設計の進め方

個別の指導計画に基づいて授業を設計するということは、その子どもにとっての指導や支援の最適化を図るということであり、それは、指導目標、指導内容、指導方法、評価について個別化を徹底して図るということの意味している。具体的には以下のような進め方で、個別の指導計画と日々の授業との接続を図り、計画を授業に生かしていくことになる。

(1) 指導目標の個別化

個別の指導計画に基づいて日々の授業実践の指導目標を個別化していくということは、P20で述べたように、個別の指導計画で設定する指導目標を単元・題材レベルにまで具体化することを意味している。その具体化の手順として、以下のような流れが一般的には考えられる。

その子どもが所属する学習集団の全体指導計画に設定されている指導の形態別の指導目標を、その子どもの実態を基にして個別化・具体化する。

全体指導計画に設定されている単元や題材の全体目標を、の指導の形態別の個別指導目標を基にして個別化・具体化し、単元や題材全体の個人目標を設定する。

日々の授業の中で、の単元・題材全体の個人目標を本時の集団全体の学習目標を基に、個人目標として更に焦点化する。

の流れで指導目標の個別化を図っていく過程で、個別の指導計画が授業との結び付きを大きくしていくことになる。しかし、の授業ごとに個人目標を設定する作業は、指導者の意識レベルで進められることが多い。したがって、現実的には及びの取組を進め、個人目標を明文化し、各単元や題材で一人一人の子どもに身に付けさせたい力を明確にしておくことが大切になる。

ただ、これらの取組を進めていく場合、学習集団全体の指導目標を個別の指導目標に下ろしていく作業は意外と難しく、ややもすると、他の子どもと同じような指導目標になってしまうことも少なくない。このような課題を解決する方策として、その子どもの実態把握から導き出された指導課題を個別の指導目標設定の際の観点として用いる方法がある。

これは、子どもの重点指導課題を、授業実践において何らかの形でアプローチするという観点から「授業レベルの課題」としてまず具体化するものである（表6参照）。そして、図7に示すように、指導の形態や単元・題材の個人目標、あるいは1単位時間の授業の個人目標を設定する際に、この授業レベルの課題の観点から焦点化を図っていく。

表6 重点指導課題の設定と授業レベルの課題への具体化例

重点指導課題	自分の経験したことや考えを、順序立てて分かりやすく相手に伝える力を身に付ける。 教師の言葉掛けに頼らず、見通しをもって主体的に活動に取り組む。
授業レベルの課題	場に応じた要求を単語レベルではなく、二～三語文で教師に伝える。 助詞を抜かないで、簡単な文章を読んだり書いたりする。 絵カードや写真カードを見て、その状況や予測される結果を説明する。 日程表を手掛かりにして、身近処理の活動に自分から取り組む。 遊びや制作活動において、教師とだけでなく友達ともかかわりながら活動する。 任された活動は、責任をもって最後まで取り組む。

指導の形態	指導の形態別の個人目標（年間目標）	授業レベルの課題
日常生活の指導	その日の学習活動予定（日程表）を見て、自分で衣服を選択し更衣に取り掛かることができる。 朝の会で、その日の学習予定を友達に説明できる。	
生活単元学習	友達と役割を分担して活動することに楽しさを味わい、自分の仕事だけでなく友達の分も手伝って活動できる。 買い物活動や調理活動において、活動の手順を把握して自分から取り組むとともに、様々な技能を高める。	
国語	サ行音とタ行音、ラ行音とダ行音の違いを文字で識別しながら正しく発音できる。 「が」「を」「に」の助詞を抜かないで用件を伝えたり、文章を書いたりできる。	

単元名	単元の全体目標	単元の個人目標	授業レベルの課題
4月 新しい学級			
5・6月 宿泊学習をしよう	入浴の仕方や寝具の扱い方など基本的な身の処置を進んで行おうとする態度を育てる。 集団の中での自分の役割を意識しながら、友達と協力して食事を作ったり、お楽しみ会をしたりして、宿泊に参加できる。	日程表を見ながら、次の活動に必要な物を自分で準備したり、整頓したりすることができる。 買い物活動の際に、見付けられない品物の売り場を店員に尋ねることができる。 絵カードを見ながら活動の流れを理解し、自分の力で調理活動を進めるとともに、友達の分担の手伝いができる。	
7月 水遊び大会			

図7 授業レベルの課題を踏まえた指導の形態及び単元ごとの個人目標の設定

(2) 指導内容の個別化

指導内容の設定に当たっては、その子どもの実態や目標に関連して、学校生活全体を通して指導すべき内容を精選し、指導の段階性を十分踏まえながら設定することになる。この場合に、日常生活の指導における基本的な生活習慣の形成に関する指導、あるいは自立活動の指導のような個別指導を前提とした指導においては、表7に示すように、指導内容のステップ化を図り、指導内容がどのように発展するのか見通しをもたせることが大切になる。

表7 個別指導における指導内容の設定例（排せつのサイン形成）

年間の目標	学期の目標	具体的な指導内容（2学期）
尿意を感じたら、「トイレ（小便）に行きたい」という意思を下腹部をトントンとたたきサインで教師に伝えることができる。	1学期： 定時排尿の際に、教師の言葉掛けと下腹部をたたき触信号を受けてトイレに移動できる。	ステップ1： 教師が本児の手をとって一緒に下腹部をたたき、手つなぎでトイレに行く。
	2学期： 定時排尿の際に、教師の言葉掛けを受けて、自分で下腹部をたたいてトイレに移動できる。	ステップ2： 教師の下腹部をたたきモデルを本児が模倣し、教師のトイレの指さしを見て、トイレに行く。
	3学期： ふだんの生活場面で自分から下腹部をたたきサインを表出し、トイレに移動できる。	ステップ3： 教師の「トイレ」という言葉掛けを受けて、自分で下腹部をたたきトイレに行く。

また、教科別の指導のようにある題材を通して個別の指導目標にアプローチする場合、表8に示すように、その題材において扱える指導内容を事前に明確にしておき、そのなか

ら子どもの指導目標達成のために必要な内容を選択する手順で授業につなげていく。日々の授業実践においては、この一人一人の興味・関心や発達段階に対応する指導内容の選択が難しく、結果として集団全員にほぼ同じ領域、レベルの内容が準備されがちである。そのような事態にならないよう、学習指導要領に示される各教科の内容を基に、より具体的な指導内容の要素を事前に明確にしておくことが望まれる。

表 8 指導の個別化のための指導内容段階表例（算数科「さかなつり」）

A 種類	B 一対一対応	C 数の大小	D 数 唱	E 数 字	F 数系列
魚の種類ごとにまとめる。 さおを集める。 バケツを片付ける。	バケツを配る。 さおを配る。 釣った魚を枠の中に一匹ずつ入れる。		3匹の魚を数える。	「3」と結び付ける。	「いち、に、さん」と続けて言える。
魚を色ごとにまとめ、色名が言える。	釣った魚を枠の中に一匹ずつ入れ、多い、少ないが分かる。	個人、色ごとの数の多少、同じを理解する。	釣った魚の数を数える。 色ごとの魚の数を数える。	自分で釣った魚の数を書く、読む。	
	両チームの魚を一対一対応させることを通して、多い 同じ 少ないを理解する。また、その差の数が分かる。	どちらのチームが勝った（多い）かが分かる。 どちらが何匹多い、少ないが分かる。	自分のチームの釣った魚の数を数える。 紅白チームの合計を数える。	チーム全体で釣った魚の数を書く、読む。	

【保坂 登 (1986) から引用】

ただし、選択された指導内容は、学習活動（内容）を構成する個々の要素であり、そのまま単独で設定されるというよりも、これらが組織されて子どもにとって魅力ある学習活動として設定されることになる。以下、学習活動を設定する際の留意点について述べる。

ア 自分から取り組める学習活動を設定する。

一人一人の子どもの実態に応じた学習活動が準備できると、子どもは自分のすることが自然に分かり、自分からその活動に取り組むことになる。実態に応じた活動とは、子どもが一人でできる、あるいはできそうな活動であり、何回も繰り返しやりたいと思える活動である。ややもすると、指導者の「これができるようになってほしい」というニーズから、子どもの興味・関心や活動への指向性とかけ離れた活動を用意しがちであるが、個別の指導計画の実態把握で明らかになったその子どもの「よさ（興味・関心の対象、今できること・できつつあることなど）」の情報を十分踏まえ、その「よさ」を生かす学習活動の設定が大切になる。

また、一人一人の子子どもが自分の役割を意識し、活動を選択したり、活動を工夫したりできるようにすることも大切である。

イ 個別の活動と集団の活動との適切な組合せについて工夫する。

一人一人の子どもの実態に応じて学習活動を充実させるということは、ある授業の中でその授業のテーマとは関連性のない個別の活動を用意することではない。また、全員に同じ活動を設定し、教師が個別的にかかわって活動させることでもない。例えば、「年賀状を書こう」

といったその授業のテーマになる活動を，その子どもの実態に合わせて，「ペンを使って書く」，「パソコンで作る」，「文字スタンプを押して作る」というように個別化することを意味している。そして，実際の授業では，以下に示すような集団と個別の活動の組合せで授業を設計・展開し，集団としての高まりをもたせながら指導の個別化を図ることになる。

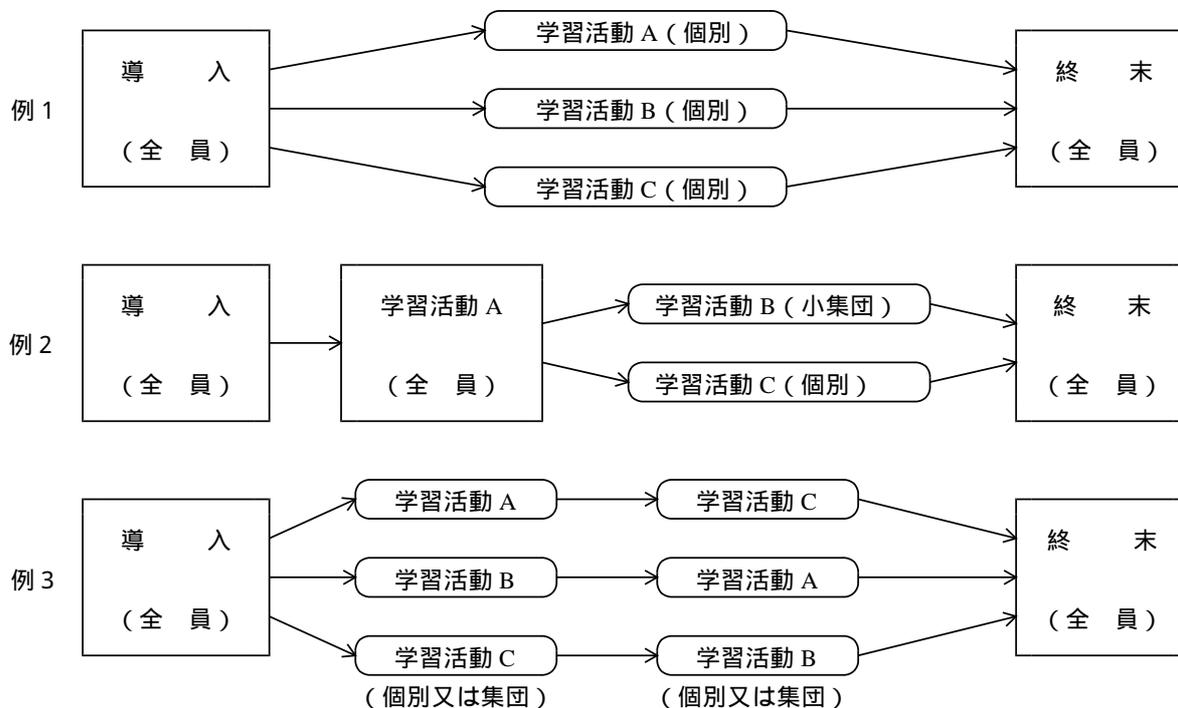


図8 集団と個別の学習活動の組合せ

(3) 指導方法の個別化

子どもの実態把握を進めていくと，障害の状態や発達段階，興味・関心や情報処理などの特性が明らかになり，同時に，望まれる働き掛けの在り方や教材・教具の工夫，学習への動機付けなどの指導方法に関する事項が導き出される。個別の指導計画を授業実践に反映させていく場合，これらの指導方法に関する計画を，その授業における学習活動に合わせてより具体化することが望まれる。具体的には，表9に示すような観点でその子どものニーズに合った指導方法を個別化し，実践していくことになる。その際，子どもがより主体的に学習活動に取り組めるようにするには，指導方法をどのように工夫したらよいかという観点から計画することが大切である。

表9 指導方法を検討する際の観点

<p>教材・教具の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもの興味・関心や運動の様子，操作性，情報処理の特性などを考慮してどのような教材・教具を使用するのか，補助具にどのような改良を加えればよいか。など <p>学習集団の構成の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもの興味・関心や発達段階，学習課題などの観点を基に，どのような集団を構成すればよいか。など ・ 子どもの対人関係の状態，注意の集中の様子から，大集団，小集団，一対一といった集団の大きさ。など <p>働き掛けの工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもの理解力や情報処理の特性，ある技能の習得レベルなどに合わせた言葉掛けや介助，示範，教材・教具の提示法など。

<p>指導体制の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 集団の中での発達段階の個人差や学習活動の展開案を基にした、チームティーチングにおける具体的な役割分担等。 <p>学習環境の設定の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもの注意の向け方や持続力、運動の様子、活動のしやすさなどの観点から、どの場所で学習するのか、掲示物や教材・教具などをどのように配置するのか。など <p>学習活動の見通しがもてるための工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どものこれまでの経験や情報処理の特性から、活動の見通しがもてるようにするための手順の示し方やその場面など。 <p>学習の成果が分かるようにする工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どものコミュニケーション能力を基に、授業での頑張りや変容、あるいは課題を子ども自身にフィードバックし、更なる意欲をもてるようにするための方法等。
--

例えば、ある自閉症の子どもの実態把握の結果とそれから導き出される全般的な指導上の配慮事項、そして、授業実践場面での主体的な学習活動のための具体的な指導方法の工夫は以下のような流れで計画される。

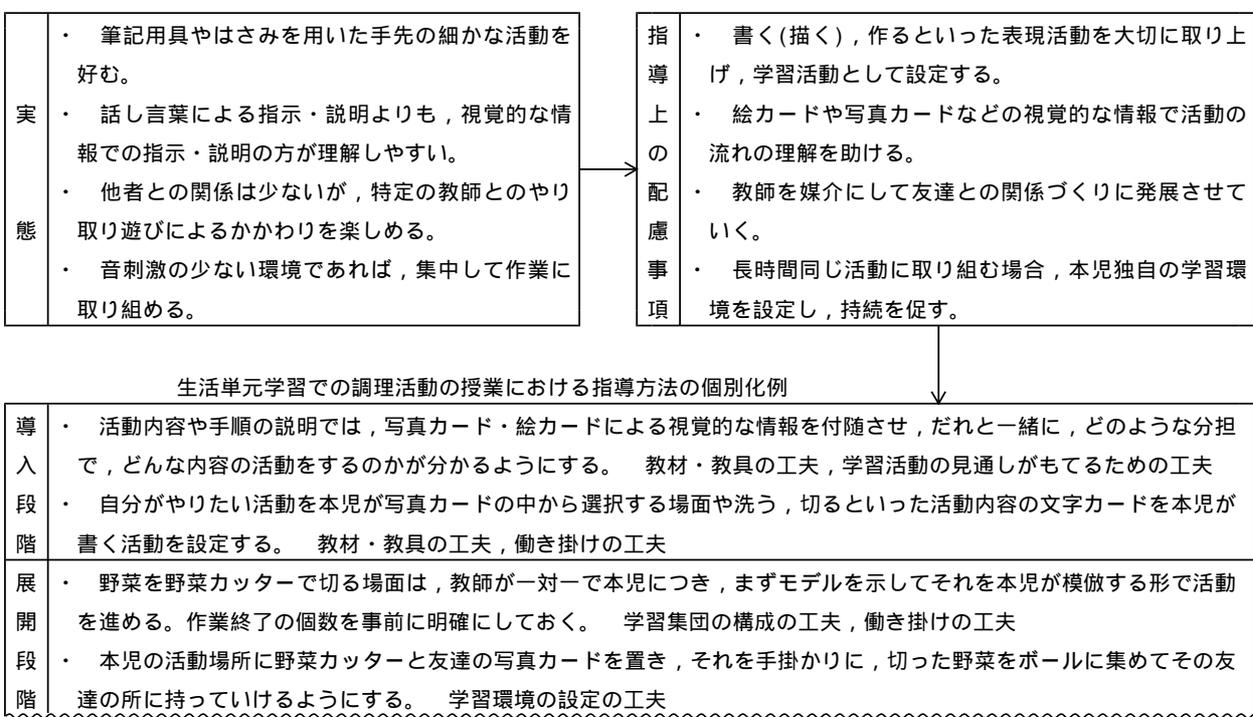


図9 授業実践における指導方法の個別化の進め方

このような指導方法の個別化は、その授業におけるねらいや活動内容、集団構成などにより具体的な進め方が違って来る。したがって、個別の指導計画で明らかになった指導上の配慮事項を固定的なものとしてとらえず、毎時の授業実践ごとに具体的な指導方法を用意しておくことが望まれる。

このことは、その子どもがより主体的に活動できるように、どのような支援上の具体的手だてを準備すればよいか計画することを意味している。単に、
 できるように励ます、
 といった留意点レベルの計画でなく、その子どもが
 できるように、具体的にどのような手だてを用意すればよいかを検討することが必要である。

(4) 評価の個別化

個別の指導計画は計画，実施，評価，改善（P - D - C - A）の大きなサイクルで展開する。ここでの評価は，学期や月などの一定期間の終了後あるいは単元や題材の終了後に行ういわゆる総括的評価を一般に想定するが，個別の指導計画を生かす授業実践においては，毎時間の到達目標を明らかにした上で，「形成的評価」を行いながらを進めることが大切になる。形成的評価を重視した評価の進め方は以下のとおりである。

ア 授業実践の中で，子どもの活動の観察等により，学習の到達度や意欲・努力などを評価して子どもに返し，学習意欲の向上に生かす。

イ 1 単位時間における子どもの到達目標に対する達成状況を指導者間で情報交換しながら客観的に明らかにするとともに，より意欲的・主体的に取り組めるような学習活動の工夫の手だてなどについて検討する。

ウ 指導記録に目標の達成状況や活動の様子を記入しておき，単元・題材終了後の総括的な評価のためのデータをそろえておくとともに，次時の授業改善につなげる。

図10に示すように，総括的評価の材料になる日常的な形成的評価を重視しながら，その情報を積極的に個別の指導計画にフィードバックし，1 単位時間の個別目標の見直し，あるいは指導方法等の改善に役立てていくことになる。

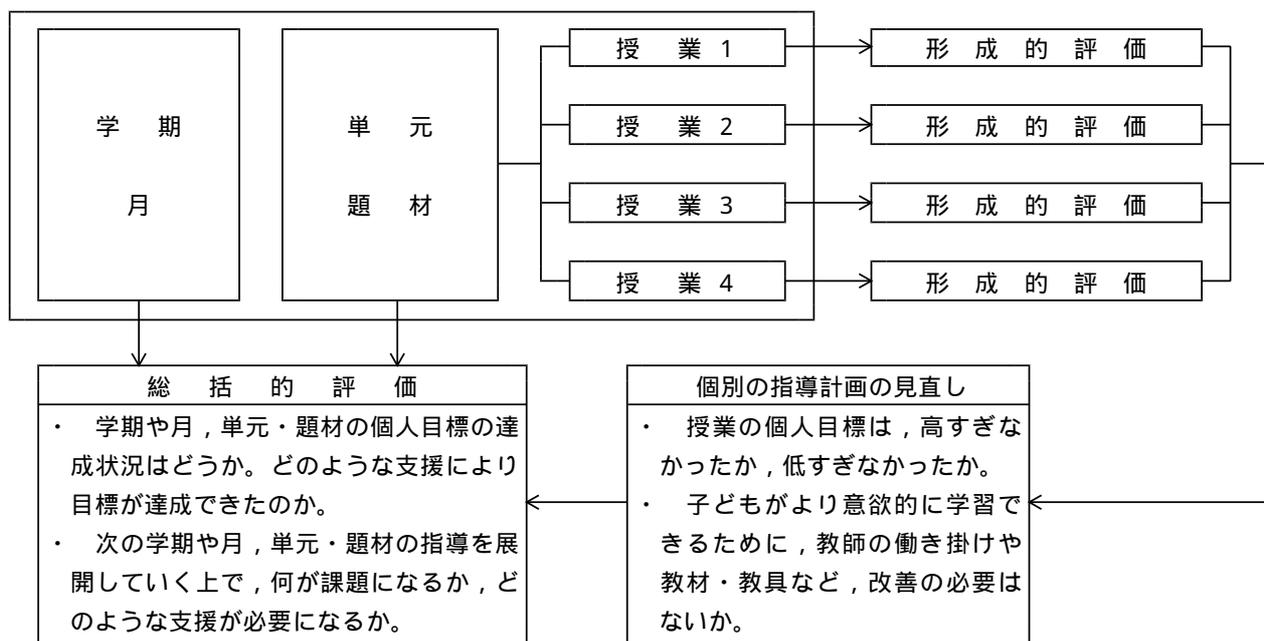


図10 形成的評価を重視した評価の進め方

(5) 個別の指導計画に基づく学習指導案（本時展開案）の作成

これまで述べてきた指導目標，指導内容，指導方法，評価の個別化は，学習指導案における本時の展開案の中で具体化されることで，個別の指導計画に基づく授業が設計され，実践されることになる。毎時の授業ごとに本時案を作成するのは現実的に難しいが，各単元や題材でポイントになる授業を図11に示すような本時展開案の書式例を参考にして設計し，子ども一人一人への学習指導を個別の指導計画に基づく最適なものにしていきたい。



共通する学習活動



個別に用意する学習活動

個別的な支援の手だて

目標	全 体					全体的な指導上の留意点
	個 別	A 児	B 児	C 児	D 児	
期	主な学習活動	全体及び個別の具体的な学習活動と支援の手だて				
導 入	1 始まりのあいさつをする。				•
7 分	2 本時の学習の確認をする。	•	
展 開	3 好きな楽器を選んで自由に遊ぶ。	•	
	4 号令に合わせて一緒に音を出す。				•
25 分						
評 価						

図11 指導の個別化を図るための本時展開案の書式例